

陸上イージスは何のため

山口支部 増山博行

北朝鮮が発射する弾道ミサイルからわが国を防御するとして、防衛省が陸上設置型の迎撃ミサイルシステム「イージス・アショア」を導入する方針と報じられたのは昨年夏である(朝日新聞 2017/8/17)。その後、候補地として秋田市と萩市の自衛隊演習場が挙げられた(中国新聞 2017/11/16)。そして12月の閣議は2023年運用開始をめざして2基を設置すると決定したが地元への説明は後述のように半年後であった。

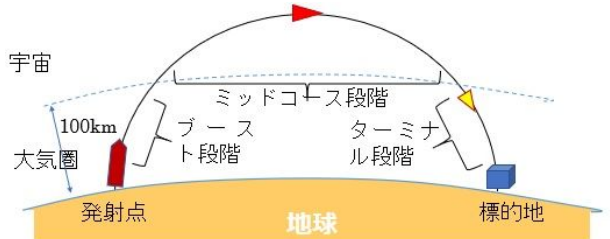
まず初めに、候補地にあがった陸上自衛隊むつみ演習場を紹介しよう。山口市の北北東35km、東アジア最大の米軍航空基地となった岩国市から北西60km、日本海まで10数kmの標高500mにある200haほどの丘である。この一帯は数十万年前の火山活動で溶岩台地が幾つも形成された。幕藩時代に開墾されていたはずであるが、稲作に向いておらず、戦後の開拓期に大陸から引き揚げた農民の手で再度開墾された。ところが朝鮮戦争の勃発で、米軍は山口県中部の秋吉台を射爆場候補としたが、地元の強力な反対運動で頓挫。代替地が探された結果、むつみ地区が選ばれ、開拓農民は満州→むつみ→信州や東北という移転を余儀なくされた。むつみ演習場は陸上自衛隊が全国に持つ100近くの演習場の一つであるが、射爆に使われることはなく、地元民から見れば草原の丘陵であり、陸上自衛隊山口駐屯地の第17普通科連隊がときおり訓練で使う平穏な場所である。

農村経済が逆風にさらされ、過疎化が進むなかでも、周辺は農業法人が頑張っ成果をあげている地域である。都会からのUターンも明るい話題となっている。そんな平和な土地がなぜに基地にされるのか?いったん戦火を交えれば真っ先に攻撃対象となるレーダー

とミサイル基地に。近隣自治会と演習場の北に隣接する阿武町長は反対の意向を述べている。

J S A山口支部が参画するミニ講座では、数ヶ月前から企画していたイージス・アショアの学習会を5月19日に開催した。この問題への関心の高さを反映して、市民を含めて30余名の参加があった。なお、学習会に先立ち、現地ツアーも行っている。以下、学習会での問題提起と討論の概略を記す。

弾道ミサイルはブースターエンジンで打ち上げられて大気圏外に出ると、力学の法則で決まる楕円(近似的には放物線)軌道をとって目標地に(朝鮮半島から東アジア最大級の米軍航空機基地岩国までは800km、関東圏までは1300kmであるので、最高高度200~300km、水平方向速度は毎秒2~3km)近づき、大気圏に再突入すると空気加熱で数千度の高温となって音速の10倍以上で落下する。これを迎撃するのが2004年度からわが国がとっている弾道ミサイル防衛(BMD)である。標地的の近くに展開するペトリオットのPAC3(射程は30km程度)、あるいは日本海で警戒するイージス艦から発射するSM3ミサイルを導入し、イージス艦だけでも2020年度には8隻になる。迎撃ミサイルの性能を上げるミサイルSM3ブロックIIA(以下、新SM3と略す)開発が日米軍事共同で進められている。昨年夏に公刊の防衛白書ではこの新SM3は日本海のイージス艦に装備するとされている。



ところが1年前に新SM3を陸上イージスに配備し2023年度から運用するという方針の大転換がはかられた。北朝鮮がたて続けに弾道ミサイルを発射して、自衛隊に撃墜命令が出されていた時期で、6年先の運用という時差に疑念を抱かせない世論操作のもと、2千億円を越える予算(最近の報道では6千億円に達する)をつぎ込むという、誰かへの防衛省の付度か。小野寺防衛大臣は新SM3を秋田と山口の2カ所の陸上イージス基地に設置し本土全域をカバーし、イージス艦は本来の「南西防衛を含め、様々な任務に」戻すというが(防衛大臣記者会見概要 2017/12/19, 防衛省ホームページ),ここに真の狙いがあるといえよう。

さて、新SM3の迎撃試験は初回の成功後は、2,3回目の実践的迎撃実験では失敗が続いており(NHK ニュース 2018/2/1),完成度に疑問が残る。防衛省のBMD構想では宇宙空間(ミッドコース段階)にある弾道ミサイルを真下から撃ち落とす図が示されている。秒速2~3kmで移動している長さが1~2mの物体を横から破壊するには千分の1秒の時間精度、10cmの空間精度で2者の軌道が会合しないといけない。小惑星探査機はやぶさの制御技術をもってすれば可能なように思われるかも知れないが、迎撃体は向きを修正できるものの、加速・減速はできないので撃墜は極めて難しい芸当であろう。弾道ミサイルの正面から接近すれば可能性は高まる。実際、PAC3や米軍が韓国に配備のTHAADによる迎撃ではそのようにしている(朝日新聞 2017/12/17, H29版防衛白書)。

関東地方を狙ってくる弾道ミサイルを迎え撃つには、弾道ミサイル発射と間髪入れずに、弾道ミサイルと同程度の性能のロケットで迎撃体を発射しなければ、山口や秋田からでは間に合わないことがすぐに分かる。陸上イージス2基で本土全体を迎撃防衛できると本気で考えているのだろうか?たとえ撃破し

ても破片は地上に降り注ぐ。都市化が進んだ人口密度の高いわが国では、弾道ミサイルを迎撃できても、撃ち漏らしがあっても、いずれも甚大な被害が予想される。国土を戦場にしてはならない。朝鮮半島で緊張緩和が進む可能性がある今、平和的解決への努力を強めることこそわが国に求められている。[以上が学習会の紹介]

ところで、今年4月の南北朝鮮首脳会談をへて、6月12日の米朝首脳会談で朝鮮半島の非核化を促進するとの共同声明が発表された。トランプ米大統領は核爆弾とその輸送兵器の廃棄の交渉中は米韓合同軍事訓練を中止すると発表。わが国では菅官房長官が「いつミサイルが向かってくるかわからない状況はあきらまらなくなかった」として、6月22日にJアラート避難訓練を中止すると発表した。北朝鮮をめぐる緊張関係が平和的に回避できる転機と考えられている。

こうした状況の変化にもかかわらず、防衛省・自衛隊は6月17~19日に萩市と隣接の阿武町の3箇所での住民説明会と、市・町議会議員への説明会を行った。住民や議員からはなぜ今、ミサイル基地をむつみに設置することが必要なのか、また住民の生活と生命への影響を危惧する発言が相次いだ。納得できる説明はなかったと報じられている。

むつみにミサイル基地が建設されると萩市、阿武町だけでなく山口市もその基地周辺地域になるであろう。先月の南北朝鮮首脳会談で朝鮮戦争の終結・朝鮮半島非核化への決意が表明されている。それにもかかわらずに中~長距離弾道ミサイルに対処できる新SM3を装備する陸上イージス基地建設が必要という。 Guamへのミサイル経路下に位置するむつみへの基地建設は、自衛隊が専守防衛論を捨て、アメリカの東アジア~太平洋戦略に組み入れられる予兆と考えるのは杞憂であろうか。